

[研究ノート]

保育者養成校における子育て支援の学びの在り方について  
ーサービス・ラーニングを視点としてー

\*長谷川 恭子  
\*\*味田 徳子  
\*\*\*浜名 那奈

Learning of Childcare Support in Nursery Teacher Training Schools  
From the Perspective of Service-Learning

Kyoko Hasegawa  
Noriko Mita  
Nana Hamana

キーワード： 子育て支援、サービス・ラーニング、グループワーク、保育者養成  
Key Words: Childcare support, Service-Learning, Groupwork, Nursery teacher training

要約： 近年、学生が主体的に学ぶ形態での指導が求められている。本研究では、この指導の手法としてサービス・ラーニングを用いた。学生たちは、授業を通して、「振り返り」「分析する」ことを積み重ねながら、子育て支援施設での発表に取り組んだ。この結果、学生の振り返りに、親子への視線の大切さや安全の配慮、保護者への意識を持つなどという観点が現れた。また、発表後の振り返りの活動からは、取り組みを客観的に捉えることができいくプロセスが確認できた。これらのことから、グループ活動によるサービス・ラーニングが、子育て支援に対する学生個人の意義の捉え方を深める結果になったと考える。

## 1. はじめに

保育者にとって、子どもの健やかな育ちを支えることは重要な役割であるが、子育て支援を担うことも大事な職務のひとつである。2008 年の「保育所保育指針」には保護者支援が重点課題として記載されているが、2023 年の「地域子育て支援拠点事業実施要綱」（厚生労働省）では、子育て親子の交流などを促す子育て支援拠点の設置を地域で推進することにより、子育て支援機能の充実を図ったり、子育ての不安感などを緩和したりすることを通して、子どもの健やかな育ちを支援していくことを目的とした取り組みが示されている。こうした世の中のニーズを理解し、保育現場でも保育者が親子の支えになることが求められているのは明白である。そのため、保育者を目指す養成校の学生が、子育て支援の取り組みとしてどのようなことを考えていかなければいけないかを知り、何が必要かを理解しておかなければならない。

このため、保育者養成課程において、子育て支援を目的とした活動の計画・実施の学習を試みた。これをもとに、保育者をを目指す学生が子育て支援について何を学び、認識しておくべきかを検討する。

## 2. 子育て支援を目的としたサービス・ラーニング

### 2-1. サービス・ラーニングの重要性

近年、学生が主体的に学ぶ形態での指導が求められている。その一つであるアクティブ・ラーニングは、2012 年 8 月、文部科学省の中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』において、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習などが含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどでも有効なアクティブ・ラーニングの方法である」と定義されている。平成 29 年改訂の学習指導要領の「改訂の基本方針③主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進」でも、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる」と記述されており、学生が主体的に学ぶための指導法が、大学だけでなく小中高でも求められている。教師からの一方的な講義ではなく、生徒・学生が主体的に学びに向き合い、個で取り組むだけでなく、生徒・学生間での関わりにより学びを深化させていくことも重要なプロセスとして取り上げている。こうした機会を教師側が授業で設定していくことが必要になっている。

主体的な学びには、サービス・ラーニングと呼ばれるものもある。サービス・ラーニングとは、「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズなどを踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取り組みや進路について新たな視野を得る教育プログラム」（文部科学省 2012 p.38）である。前述した文部科学省の2012年8月の答申では、サービス・ラーニングの導入についても「①専門教育を通して獲得した専門的な知識・技能の現実社会で実際に活用できる知識・技能への変化、②将来の職業について考える機会の付与、③自らの社会的役割を意識することによる、市民として必要な資質・能力の向上、などの効果が期待できる」と提示している。こうしたサービス・ラーニングの実践例について、中里ら（2015）は「初年次教育や教養課程の一環として実践されるサービス<sup>マ</sup>ラーニング」「専門教育の一環として実践されるサービス<sup>マ</sup>ラーニング」があると述べている。文部科学省が答申で提示した項目をふまえると、後者の実践として行うことがサービス・ラーニングの定義の効果を上げることになるといえよう。つまり、学生が専門知識として得てきた学びを活動として活用し、課題を見出していくためのプロセスと捉えると、サービス・ラーニングは有効的な学習方法といえるのではないか。

また、中里らは、サービス・ラーニングの教育的効果を促進する条件として、「学生自身の活動目標の明確化」「学生自身の活動目標に即した適切な省察（振り返り）」を、さらに「活動目標に即し、適切な順序とタイミングで振り返りを蓄積していく」ためのポイントとして「活動結果ではなく、活動プロセスに着目して振り返りを行うこと」「活動経験の振り返りに基づいて学生自身の行動原理や教訓を抽出すること」「振り返りの対象となる活動経験を学術的知識と関連づけること」を挙げている（前掲書 p.175～176）。このような条件を満たしていくためには、学生がポートフォリオを作成していくことが適切と考える。これについて、山本・横山（2018）は「アクティブ<sup>マ</sup>ラーニングの振り返りを重視したリフレクティブ（省察的）な学びにおいて、学修ポートフォリオは必要不可欠」（p.125）だと述べている。また、土持（2015）は学生が学習を振り返るために書かせるラーニング・ポートフォリオで自問自答させるために必要なことについて「何を学びましたか。どのように学びの役に立ちましたか、立ちませんでしたか。それはどのような価値のものでしたか。これからも学んでいく計画があるか」（p.51）であるとし、「学生が提出するペーパーに価値があるのではなく、『考えて書く』ところに価値がある」（p.52）と説明している。また、ポートフォリオの要素の一つとして「協同学習」を挙げており、「自己学習を高める（Enhance Own Learning）ために、グループ学習などの協同学習が重要になる。学生間の協力から学びを深めることができる。コラボレーションが行われれば、それは『深い学び』（Deep Learning）につながる」（p.58）と述べている。

このように主体的な学びと省察は密接な関係にあることから、サービス・ラーニングを行う上でポートフォリオの作成は重要な学びのプロセスだといえる。

## 2-2. 保育者養成課程におけるサービス・ラーニングを観点とした子育て支援の取り組み

保育者養成課程で子育て支援を観点としたサービス・ラーニングを行うことは、田岡（2022）が「保育士養成校等で行う子育て支援活動のサービス<sup>ママ</sup>ラーニングとしての意義は、地域社会と一丸となり、将来地域社会に貢献し得る保育者の養成である」（p. 102）と述べている通り、〈保育〉を子育て支援の観点から捉えていくスキルを育成するためにも重要である。そのためには、「経験学習の形態をとることからプロセス指向の観点を意識することが重要」（田岡 前掲書 p. 102）である。

このように、アクティブ・ラーニングもサービス・ラーニングも、学生が主体となって行う学びとしては重要な教育プロセスである。これを踏まえて保育者養成校における有効的な学びと考えると、サービス・ラーニングを目的とし、そのための学習過程としてアクティブ・ラーニングを行なっていくというのが適切であろう。この過程で、中里らが提示する条件を踏んでいくことは大事であり、そのために土持が提示した観点でポートフォリオを使った振り返りを行なっていくことも重要であると考ええる。

保育者にとって子育て支援は重要な役割であり、保育現場での実習は子どもの成長を支えることに関するニーズを学ぶサービス・ラーニングであるともいえよう。しかし、親子を支えるという観点で考えた場合、保育現場は養育者と子どもが関わっている場に接することは少なく、保育者養成校の学生には親子との関わりという意味での学びを得る機会は多くない。このことから、子どもの成長を支えていくためには、親子の理解を深め、子育て支援のニーズを捉えておくことも重要であり、保育者養成校では学生と親子の関わりを設定し、それに向けたサービス・ラーニングを行うことが必要だといえる。近年、保育者養成課程で子育て支援の場によるサービス・ラーニングの学びが取り上げられているが、学生が子育て支援の場からどのような学びを得たと認識したかを明らかにしていくことが、学びの意義を明らかにしていくことに繋がると考える。

以上のことから、本研究ではこの指導の手法として、サービス・ラーニングを用いた。学生たちは、授業を通して、「振り返り」「分析する」ことを積み重ねながら、子育て支援施設での発表に取り組んだ。この発表を踏まえ、学生が何を学んだのか、事後に行った振り返りのアンケートをもとに、子育て支援を目的としたサービス・ラーニングの意義を検討する。

## 3. 調査と分析

### 3-1. 取り組みの概要と手順

A 短期大学3年生『保育・教職実践演習（幼稚園）』の授業において、サービス・ラーニングの手法を用い、子育て支援を目的とした活動の計画・実施の学習を試みた。学生たちは、毎回の授業を通して、子育て支援施設での発表に取り組んだ。指導の概要は、以下

の通りである。

- ① 授業終了時、各グループで「本日の行動計画実施報告書」（ポートフォリオ）を書き、実施内容と次回の行動計画を発表にて共有→報告書提出→教員チェック→次の時間に返却
- ② 発表施設見学 ※子育て支援施設
- ③ 学内リハーサル実施・振り返り（修正、改善）指導
- ④ 発表後、振り返りアンケート実施
- ⑤ 振り返りの授業（グループワーク）

授業は、2023 年 9 月から 1 月にかけて、15 回行われた。発表施設は所沢市の子育て支援施設 B とし、クラスごと、二日に分けて 1 月に行うこととした。学生たちが発表を行う午前中は乳児の親子が多いため、乳児向けの発表内容、安全面の配慮などが求められた。ある程度の企画・準備を進めたところで、クラスごとに子育て支援施設 B の見学を行った。見学は、発表時間と同時刻の午前中に行い、利用している親子との交流を行うことで、発表参加者となるであろう親子の様子を知り、発表準備の改善を行った。また、別日の閉館時間にも下見を行い、発表を実施する場所の決定、小道具などの置き場や発表者以外の学生の待機場所などの検討も行った。この両日は、子育て支援施設 B の支援員からアドバイスをいただいております、それをもとにした振り返りと改善を学内で行っている。学内でのリハーサルは 2 回実施した。1 回目はクラスごとに行い、発表を通して行った後、改善点についてディスカッションを行った。2 回目は合同で発表を行い、ビデオ撮影をした。これについては、冬休み中に Google Classroom で動画公開をし、視聴後に発表の各演目について Google form を用いて良い点・改善点についてコメントをするように求め、書き込まれたコメントは休み明けの授業で発表し、改善に努めた。

本研究では、授業終了後の「本日の行動計画実施報告書」と、発表に関する参加者アンケートおよび学生の振り返りを分析することで、学生にどのような学びがあったのかを考察する。対象学生は、A 短期大学 3 年生 45 名である。

### 3-2. 発表における振り返り

発表は、前述した通り、所沢市の子育て支援施設 B において、クラスごとに二日に分けて、11 時から 30 分ほどのイベントとして行った。発表内容は、表 1 の通りである。

参加者の内訳は、表 2 の通りである。

参加者は保護者の数となっており、両日の組数はあまり差がないものの、1 日目は母親のみが 10 名、父親のみが 2 名、両親が 5 名、その他が 1 名であったのに対し、2 日目は母親が 17 名のみであった。週末と平日の差であったかもしれない。また、施設職員の 2 名は、両日とも同じ人物であった。参加した子どもの内訳については、図 1 のようになっている。

表 1 各クラスの発表内容

1日目（土曜）	2日目（月曜）
創作劇（カレーライス作り）	手遊び
パネルシアター（野菜クイズと手遊び）	劇（歌）『はらぺこあおむし』
わらべうた遊び	親子活動（遊ばせ遊び、絵本読み聞かせ）
体操（エビカニクス）	体操（サンサン体操）

表 2 発表当日の参加者内訳

	学生	参加者（保護者）	施設職員
1日目（土曜）	22名	23名（18組）	2名
2日目（月曜）	23名	17名（17組）	2名

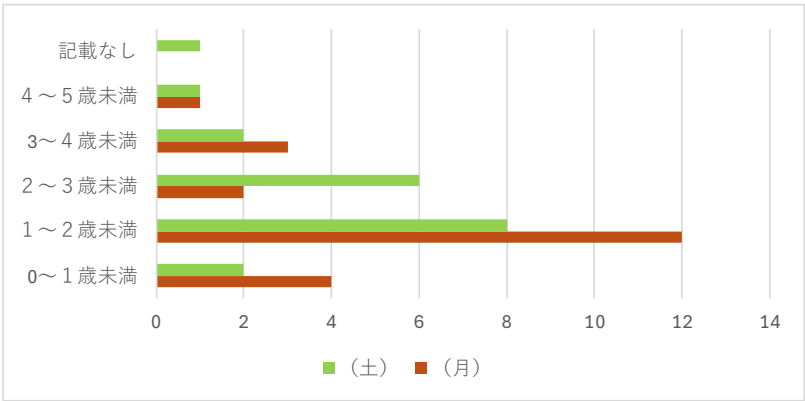


図 1 参加した子どもの内訳

全体的に乳児が多く、保護者 1 組に対して子ども 1 名という家族が多い傾向であった。

3-2-1. 保護者へのアンケート

発表終了後、保護者には紙面で発表を見たアンケートを行っている。アンケートの回答数は、両日とも表 2 の参加者の組数分（1 日目 18 組、2 日目 17 組）であった（回答率 100 %）。アンケートの内容は、表 3 の通りである。

「楽しかった演目」（図 2）については、劇への評価は高かったものの、よく知られている絵本を劇にしたものが楽しかったという感想に対して、創作劇は難しいという感想であった。「難しかった演目」については、乳児には全身を使ったり考えたりする内容が難しく

表 3 保護者へのアンケート（分析する項目のみ）

発表の演目で、楽しかったものに○をつけてください。

発表の演目で、乳児（2 歳以下）のお子様には難しかったと思われるものに○をつけてください。（乳児以下のお子様をお連れいただいた保護者様のみお答えください）

発表の演目で、幼児（3 歳以上）のお子様には難しかったと思われるものに○をつけてください。（幼児のお子様をお連れいただいた保護者様のみお答えください）

ご感想をお聞かせください。

(図 3)、幼児は乳児に比べて難しいと感じたものは少なくなっているが、体操、劇などは、演目内容による傾向であった(図 4)。保護者の感想からは、身体を動かすような活動や、セリフで進行しないような活動が楽しめたという傾向が窺えた。1 日目の創作劇は食育の内容で、間に歌などがあったもののセリフで進行する部分も多く、特に乳児には難しいと判断しているようであった。それに比べ、2 日目の『はらぺこあおむし』は有名な絵本をベースにしており、ほとんどが歌『はらぺこあおむし』を歌いながらの進行であったため、雰囲気が楽しげで内容も難しくなく、聞き取りにくさがなかったと考える。また、クイズとなっていた 1 日目のパネルシアターは乳児・幼児とも難しく、乳児寄りの内容となっていた手遊びや親子活動は、幼児の活動としては難度というよりは適さないという判断だったのではな

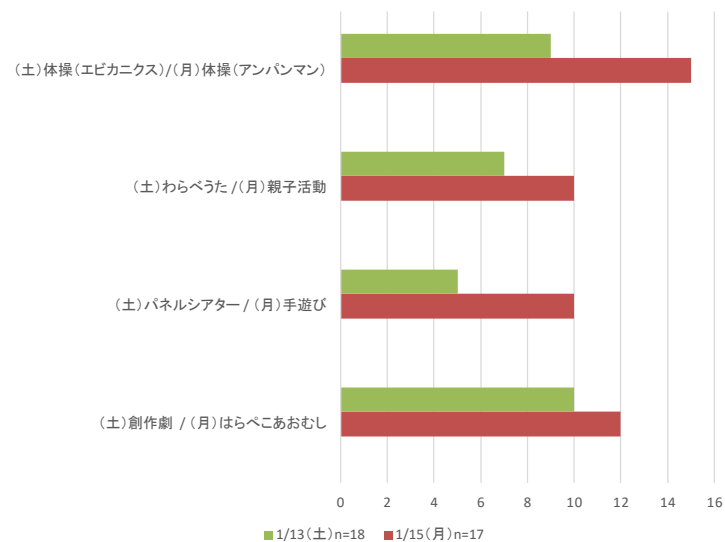


図 2 発表の演目で楽しかった演目

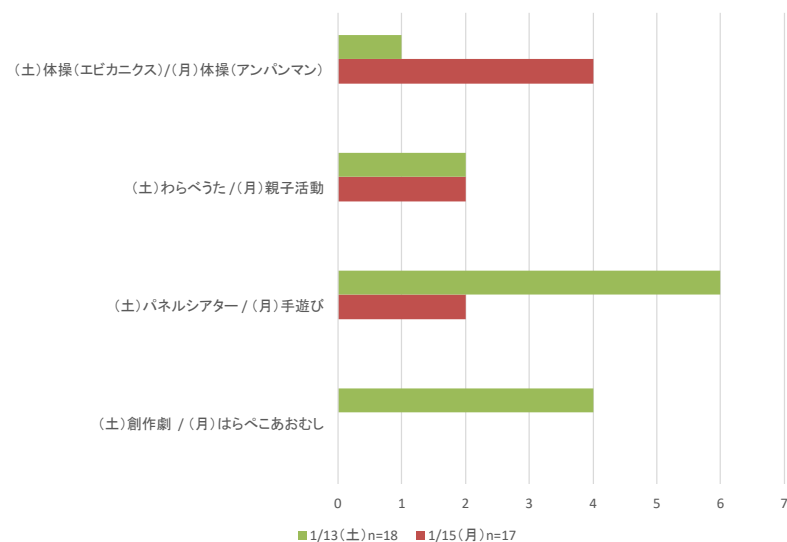


図 3 乳児(2歳以下)には難しかった演目

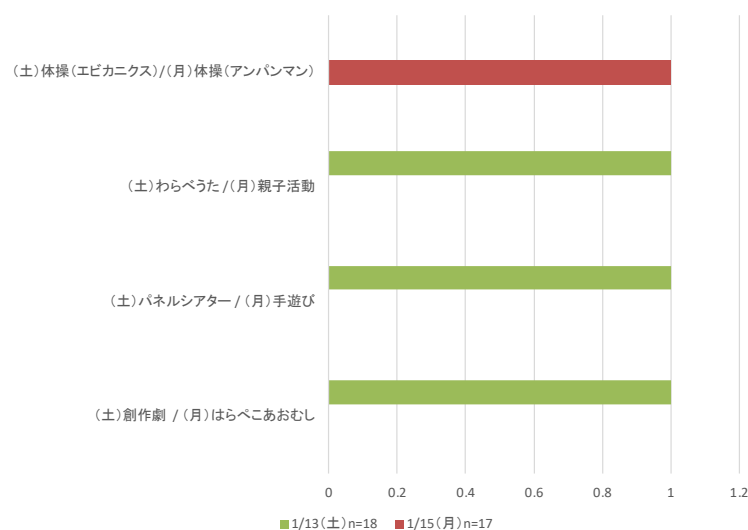


図4 幼児（3歳以上）には難しかった演目

いかと推測される。

これらの結果から、内容の構築には、子どもの発達や親がどのように判断するのかを意識しておく必要があることが示されたと考察する。

### 3-2-2. 学生の発表後の振り返りアンケート

学生には、発表後に Google フォームで配信した振り返りのアンケートに答えることを課していた。回答数は、38 名であった（回答率 84%）。アンケートの内容は、表 4 の通りである。ここでは、質問項目に合わせ、(1)準備について（アンケート項目①②）、(2)グループ発表について（アンケート項目③④）、(3)クラス全体について（アンケート項目⑤⑥）、(4)保育者として子育て支援に必要な意識（アンケート項目⑦）、の 4 項目に分けて分析する。選択肢の項目（アンケート項目①③⑤）については回答の構成比率を示す。自由記述の項目（アンケート項目②④⑥⑦）については、共起ネットワークを抽出し（集計単位：文、最小出現数：3、Jaccard 係数：0, 2）、使用頻度が高く表示されたキーワード（大きく表示されたもの）を視点として、学生が自分たちの発表をどのように捉えているのかを分析する。

表 4 発表後の振り返りのアンケート

- 
- ① 発表までを振り返り、準備に積極的に参加できましたか。（選択肢）
  - ② ①の理由を書いてください。（自由記述）
  - ③ グループの発表は、よくできたと思いますか。（選択肢）
  - ④ ③の理由を書いてください。（自由記述）
  - ⑤ クラス全体の発表は、よくできたと思いますか。（選択肢）
  - ⑥ ⑤の理由を書いてください。（自由記述）
  - ⑦ 今回の活動を通して、保育者として子育て支援をするにあたり意識していなければいけないこと（認識、視点、技術、etc.）は何だと思いますか。（自由記述）



## (1) 準備について

準備については、全員が「積極的に参加できた」「まあまあ参加できた」と回答した(図5)。その理由(図6)では、「グループ」「意見」「練習」「参加」などのキーワードが見られた。「グループ」「意見」「参加」については、グループで行うことを確認し合った、話し合った、意見を出し合ったなど、グループでの協同についての意見がほとんどであった。「練習」については、「ギリギリまで練習を行い、改善点を伝えることができたから」「クラスで集まって練習をたくさんして最後まで調整を重ねていたから」などの記述などの記述が多く、子どもの発達や興味に合わせることなどの内容の向上のための取り組みや、練習のための意見交換についての意見が見られた。

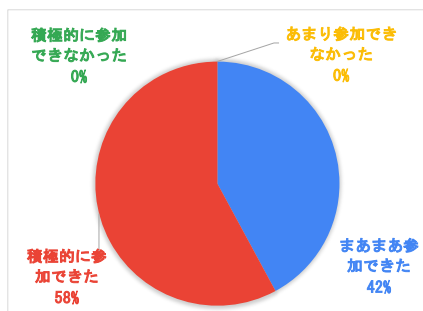


図5 準備に積極的に参加したか

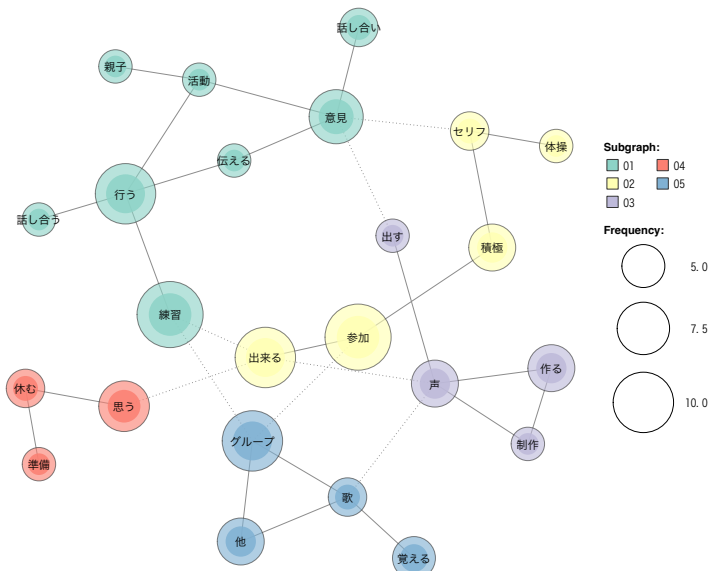


図6 準備への参加度の理由

## (2) グループ発表について

グループ発表については、「とてもよくできた」と回答した学生が7割であり、「まあまあできた」が3割と、多くの学生の満足度が高かったことが窺える(図7)。その理由(図8)では、「人」「子ども」「声」などのキーワードが見られた。「人」については、「道を誘導する人と両橋を見守りながら運ぶ人の役割分担ができていた」「言葉に詰まってしまったけれど一緒にグループの人がフォローしてくれたことが嬉しかった」など、グループメンバーの役割分担や一緒にグループの人のフォローなどの協力体制について挙げたものが最も多かったが、「同じグループの人の声が聞こえて、リラックスして笑顔で体操することができた」のように発表時に他の人の声が聞こえたことによる安心感や、「前だけでなく、左右前後の人が楽しめるように」のように参加者が楽しむことへの意識に関する意見も見られた。「子ども」については、「子どもはもちろん保護者の方も劇を楽しんでいる姿を見るこ

とができてとても嬉しく」や「子ども・保護者と一緒に笑顔で楽しんで行うことができた」「子どもの安全にも配慮して取り組むことができました」など、子どもや保護者が楽しむことや反応、安全に関する意識ができたことに関する意見であった。「声」については、「大きな声で聞こえるように」「周りを見つつ声を通るように心がけた」など、大きな声、声の通りなどを意識して行うことができたことに関する意見がほとんどであった。

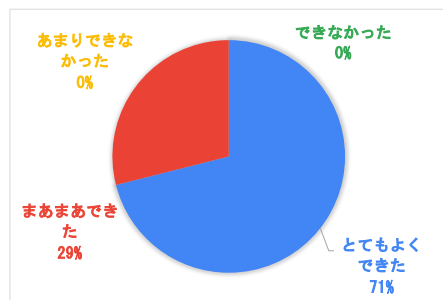


図7 グループの発表はよくできたか

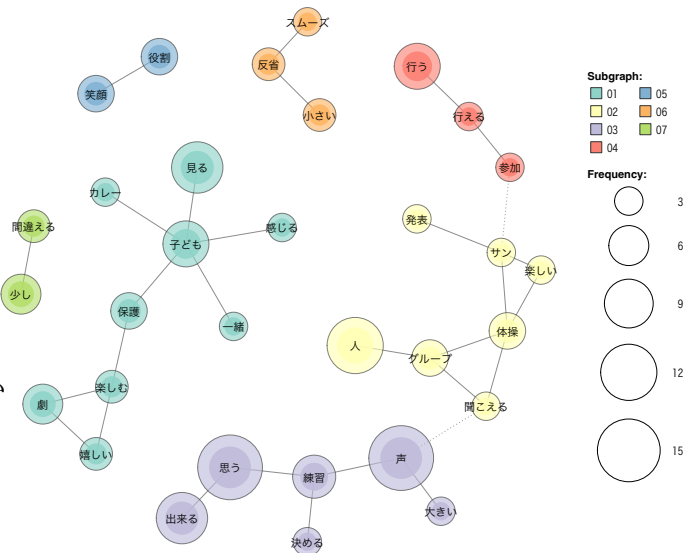


図8 グループ発表の出来の理由

(3)

(4) クラス全体について

クラス発表については、「とてもよくできた」が8割超え、「まあまあできた」が2割弱と、ほとんどの学生が全体の出来に満足している結果となった(図9)。その理由(図10)では、「できる」「子ども」「声」「楽しい」などのキーワードが見られ、「子ども」「声」がグループ発表と重なっていた。「できる」については、「子どもの安全を見守ることが出来ていた」「親子も楽しそうに取り組むことが出来て嬉しかった」「協力して、連携しながら発表が出来ていた」など、子どもの安全や配慮に関する意見、子どもや参加者が楽しむ様子が見られたことへの意見、発表自体の進行が良好だったり協力できたりしたことへの意見があった。「子ども」については、「できる」と同様に安全や配慮に関するものも見られたが、多くが「子どもや保護者と関わり合いながら活動をすることができていた」「子どもも保護者も楽しそうに見ていたからよかった」など、子どもと保護者が楽しんだことを喜んでいる意見であった。「声」については、発表の進行時に関する声の大きさについて、「声の大きさも動きも良かった」のように適切であったという評価とともに、「声は小さくて聞こえづらかった」のように小さかったという否定的な評価が挙げられた。「楽しい」については、「保護者の方や子どもたちもとても楽しそうだったから」など、子どもと保護者が楽しんでいた様子についての意見だけでなく、「私たちも楽しく

発表できたから」のように、発表した学生たちが楽しみながら発表したり参加者と関わったりできたことについての意見も多く挙げられた。

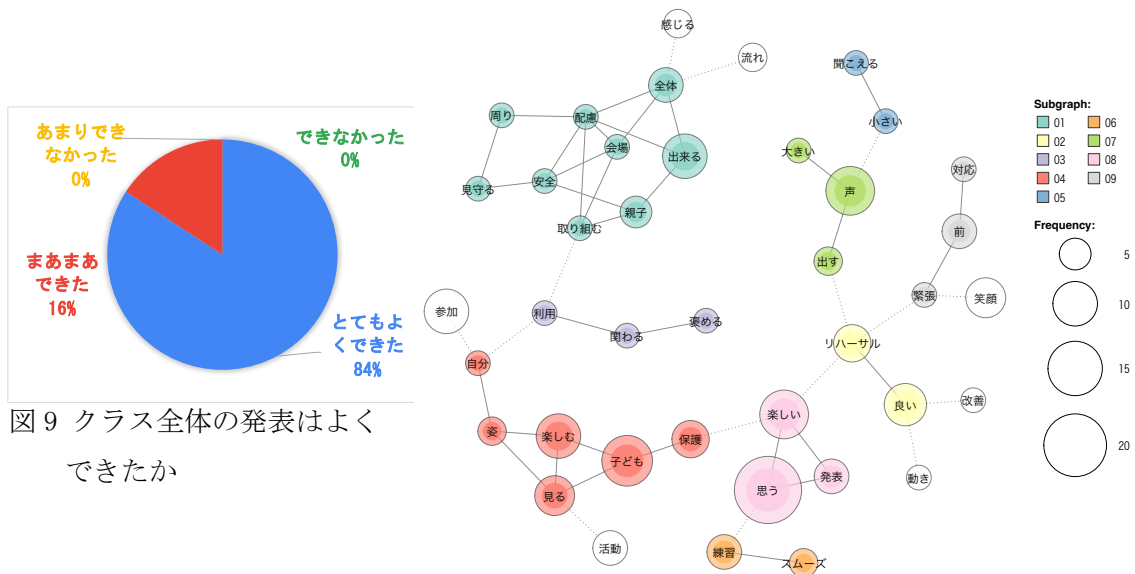


図 10 グループ発表の出来の理由

#### (5) 保育者として子育て支援に必要な意識

保育者として子育て支援に必要な意識については、「子ども」「保護」が目立って多いキーワードとなった（図 11）。「子ども」については、「周りの保護者、子どもへの気配りや声掛けを行うことが大事」などの子どもの見守りや寄り添いについて、「子どもの動きや保護者の動きを見ながら臨機応変に対応することが大切」などの子どもの動きに対する臨機応変な対応に関すること、「子どもの動き目線、保護者も楽しめるか」などの子どもと保護者・子ども同士の関わりなどについて、「子どもが安心して楽しめる方法や安全にできるように配慮すること」などの子どもへの対応や子どもの安全についての記述が多く、「子どもの発達状況に合わせた活動を行うこと」などの子どもの発達や興味に合わせることなどの記述も見られた。「保護」は全てが保護者のことであり、「保護者の方が何を求めているのかを見極め適切な支援を行う」などの子どもと保護者の希望に合わせた関わり方や、「子どもが楽しめることが一番だが、保護者も一緒にいる場合は保護者が安心できる環境づくりが大切」のように子どもと保護者が楽しめるような環境の工夫、「子どもに寄り添うのはもちろん、保護者にどれだけ寄り添えるかが大切」などの子育てに関する保護者への寄り添いや関わり方に関するものであった。

これらのことから、学生は発表の出来に満足していることと、このような子育て支援の活動に必要な保育者としての意識は、親子への配慮や、子どもの発達理解の大切さ、保育者（学生）間の協同、子どもの安全の確保、保育者自身も楽しむべきだと理解したことが示さ

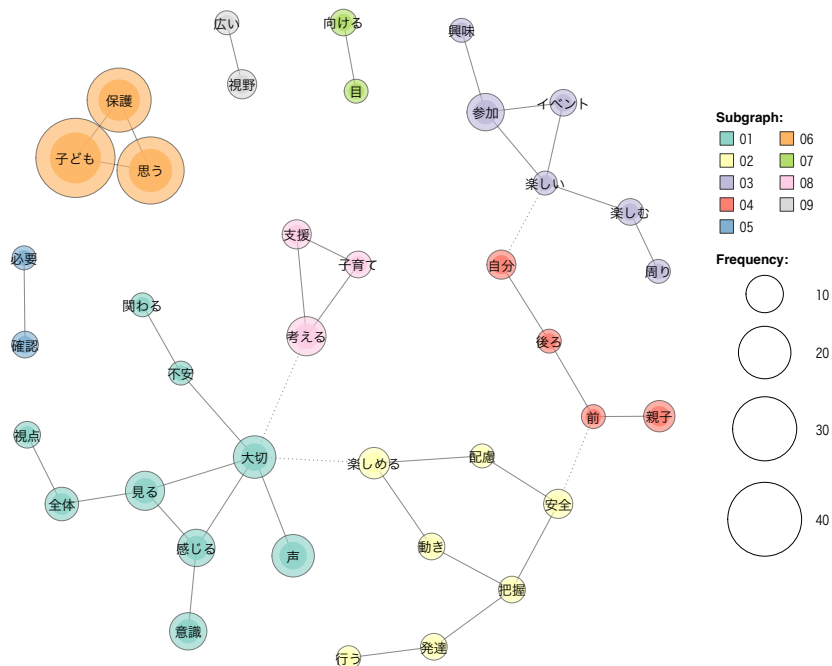


図 11 保育者として子育て支援に必要な意義について

れた。

### 3-3. 振り返りの授業（グループワーク）

発表後、学生たちには当日のビデオをオンラインで配信し、観ておくように指示をした。その上で、次の授業では、2 クラス合同で今回の取り組みについての振り返りを行った。この手法としては、アクティブ・ラーニングのジグソー法を参考に、以下の手順で行った。

- ① 発表グループでの振り返りのディスカッションで意見をまとめる
- ② 各発表グループのメンバーの集合グループを作成し、振り返りのディスカッションで意見をまとめる
- ③ 二つのディスカッションをふまえて、自分の学びになったことを考察する

これらの学生の振り返りからは、学生間で改善点の意見交換をすることの大切さを感じたことが窺われた。「リハーサルを行っての反省を踏まえた訂正点など、グループ内で話し合って参加することができた」「一人が頑張ろうと思っても皆で協力してより良くするために、改善点を言い合う機会はとてもためになった」など、個人では気づくことができなかった部分にグループだからこそ気づけたという意見が多く見られた。また、リハーサルを改善の意見交換の機会にしたことも、より良いものを作ろうという学生たちのモチベーションの向上に役立った。「リハーサルでもらったアドバイスから修正をして動きを合わせたりした」「様々な人の意見を参考にしながらあおむしの劇をより良くすることができた」「リハ

一サルの時よりもスムーズにできたり声も大きく出したことで親子も楽しそうに取り組むことが出来て嬉しかった」など、発表に向けての向上心の表れや、改善を試みたことで良い結果を得られたという満足感などが学生の意見に表れており、学生の頑張りが結果に繋がったのだと意識できている様子が読み取れる。

また、発表直後に施設職員 2 名と担当教員 3 名から講評を行っていたが、ここでプラスの講評があったことが学生の自信に繋がったことも、意見として挙げた。「たくさん褒められた」「私的には、何とかはなったがあまり良いものでは無かったのではないかと思っていたが、職員の方や先生方からのお褒めの言葉を頂いたことにより、全体的に一人一人が頑張っていたことや、出番でないときも関わっていたことから、良いものだと評価して頂けたのかなと考えたと共に、もう少し褒めてもいいのだなと感じた」など、他者からの評価で学生の観点が広がり、自信に繋がった様子が窺われた。

これらのことは、振り返りを行う上で、他者の意見を得る機会が大事であることを示唆している。個人による振り返りでは主観が強く、その捉え方はまちまちであったであろうが、他者の意見を得ることで、視点が変わったり、客観的に捉えられるようになったことが確認できた。

#### 3-4. 考察

発表後の保護者と学生のアンケートからは、質問の項目は違うものの、同じ観点で結果を感じ取っていることが窺える結果となった。保護者のアンケートのデータについては、アンケートの母数が少ないため、やや信憑性に欠けている。データ数が少ない理由については、子育て支援施設という性質もあり、発表が終わったところで別の遊びのスペースに移動してしまっただけでアンケートの記述を頼むことができなかったりしたことで、実際の参加者より少ない数になってしまったという経緯がある。しかし、少ないデータ数ではあるが、保護者の目線による評価の目安を捉えることはできた。保護者が子どもにとってどうであったかを判断した結果について、学生は親子にとってどうであったかという観点で考察をしていた。このことが、親と子の両方への配慮の必要性や、子どもの発達理解や安全の確保の重要性への気づきとなった。また、実際に親子と関わったことで、子育て支援に必要なものを広い視野で捉えられるようになったことが窺える。このことから、実際に親子を目の前にして実践することの意義が、保護者と学生のアンケート結果に現れたと考える。

また、発表後の振り返りの活動からは、取り組みを客観的に捉えることができいくプロセスが確認できた。これについては、さまざまな意見を持ち寄ってはいるものの、結論を深めていくことができている様子がディスカッションに現れており、その結果、個人の意見も客観的ではあるが深い考察になっていた。

これらのことから、グループ活動の取り組みが、学生個人の意義の捉え方を深める結果になったと考える。

#### 4. 結論

本研究では、必修科目の総仕上げの発表の場として、地域子育て支援施設と連携をとりながら授業を展開した。学生の振り返りに、親子への視線の大切さや安全の配慮、保護者への意識を持つなどという観点が現れたことは、学内における模擬保育発表ではなかなか体験できない視点による気づきだと考える。また、学生に対するこの取り組みの満足度調査では、グループ活動の満足度が高かった（図 12）。これは、授業の目的がグループで一つのものを作り上げるといった学習内容であったため、学生の達成感に繋がったものである。このような学びが得られた理由としては、15 回の授業に積極的に参加し、企画・運営の準備を十分に行うことができた結果であろう（R5 年〔学内模擬授業発表会〕授業出席率：90.9% R6 年〔学外模擬授業発表〕授業出席率：95.4%…算出方法：欠席コマ数/〔授業コマ数×人数〕）。

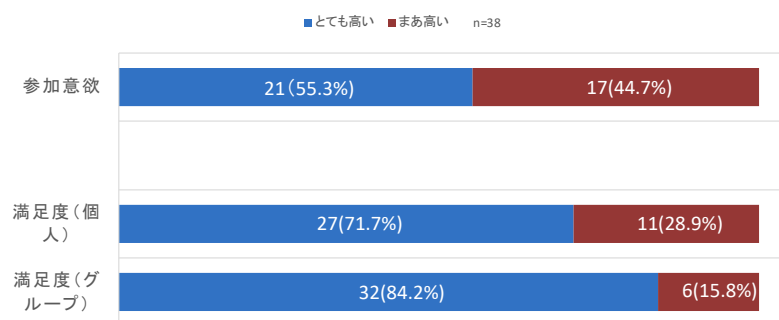


図 12 子育て支援施設での発表に向けた授業の満足度

学生は今回、子ども向けの演目を検討した。母親との参加を想定していたが、父親の参加もあったことから、親の役割をうまく活かせる内容に繋げていくためにも、親目線のプログラムを企画する必要性を感じた。演目の劇や体操は、視覚的に大きく捉えられるものであり、分かりやすく、集中しやすいというメリットがある。特によく知られている絵本の劇については、親自身が童心に返って楽しめるため、親の癒し効果も期待できていたのではないだろうか。また、創作劇やパネルシアターなどは、両日とも 3 歳未満児がほとんどであったため、言葉のやり取りや想像性が求められる内容であり、発達年齢的に難しかったものと推察される。わらべうたや手遊びなども、乳児には適切なあそびと思いがちであったが、保護者には難しいものと捉えられていた。これについて、今回のアンケートでは難しいと思った理由を聞く質問を行なっていなかったため、今後詳細を把握していきたい。

サービス・ラーニングの視点で考えると、前述した子育て支援施設 B での見学や下見などが企画の工夫や改善に活かされたからこそ、発表後の振り返りでグループやクラス全体の発表が「とてもよくできた」と感じた学生が多い結果につながった。こうした結果を産むこ

とができた要因は、子育て支援施設 B の見学や下見が地域のニーズを捉えることになったことによると考える。また、施設職員から学生に向けて、対象者への配慮が出来ていたとの評価のコメントがあった。こうした評価が、学生に地域のニーズに応えられたことを認識させたと捉えられる。保育現場の方からのコメントを直接いただくことはとても貴重であり、学生自身の今後の保育活動の礎になり自信に繋がったことが、アンケートの結果に表れている。

今回の取り組みでは、学生の振り返りを十分に行うことができた。しかし、それを評価するためのルーブリックを適切に設定すれば、地域活動や保護者への対応という観点の企画の改善が可能であったが、そこまでには至らなかった。特に、中里が提示していた「振り返りの対象となる活動経験を学術的知識と関連づけること」については、学術知識との関連まで深めることができなかった。このためには、学生が対象に合わせた活動内容を提供できるよう、施設利用者の年齢・特徴の情報提示や、個人計画作成からのブラッシュアップとしてグループ活動に繋げていくというプロセスも必要なのではないかと感じられた。また、グループ活動は円滑に行われたことは振り返りから明らかとなっているが、グループの中で個人の意見や活動が活性化するような学びがあったかまでは、明らかにできていない。グループ活動が重要ではあるが、それをふまえた個人の学びを明らかにしていくことも必要である。今後は、個人の振り返りについてラーニング・ポートフォリオ評価を行うためのルーブリック案を検討することとしたい。

#### 〈引用文献〉

- 田岡紀美子 (2022) 「短期大学を拠点とした学生主体の子育て支援活動の意義 ぶんぶんひろばでのサービスラーニングに着目して」 『紀要』 24 (滋賀文京短期大学), pp. 93-112.
- 土持ゲーリー法一 (2015) 「アクティブラーニングを加速させるーラーニング・ポートフォリオの省察的学習」 (特集 アクティブラーニングとポートフォリオ) 主体的学び研究所 (東進堂) 『主体的学び』 3 号, pp. 41-71.
- 中里陽子、吉村裕子、津曲隆 (2015) 「サービスラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について」 『アドミニストレーション』 第 22 巻第 1 号, pp. 164-181.
- 文部科学省 中央教育審議会 (2012) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)』
- 山本美紀、横山明子 (2018) 「理工系学部の初年次教育における自律型学修者の育成の試みーアクティブラーニングと学修ポートフォリオの活用ー」 『帝京大学宇都宮キャンパス研究年報人文編』 24, pp. 107-128.

※本研究の調査は、秋草学園短期大学の倫理審査委員会の承認を行い、行ったものである(受付番号 2023-9)。

\*長谷川 恭子 秋草学園短期大学 地域保育学科 教授

\*\*味田 徳子 秋草学園短期大学 地域保育学科 講師

\*\*\*浜名 那奈 秋草学園短期大学 地域保育学科 非常勤講師